

変わり続ける社会-空間系の記述方法の探索

—タイ北部・ユースック村を事例として—

Exploring Description Method of Socio-Spatial System in Continuous Change

-A Case Study of Yusuk Village, Northern Thailand-

○北 雄介 (長岡造形大学)^{*1} 伊藤 洋志 (ナリワイ)^{*2} 福田 真澄 (株式会社土井工務店)^{*3}
早川 貴光 (株式会社タテイシ広美社)^{*4} 櫻井 康平 (長岡造形大学大学院)^{*5}

^{*1} Yusuke Kita, Nagaoka Institute of Design, 4-197, Senshu, Nagaoka-shi, Niigata, 940-2088, ykita@nagaoka-id.ac.jp

^{*2} Hiroshi Ito, Nariwai, 2nd floor, Ishigami Bld., 4-7-15, Koyama, Shinagawa-ku, Tokyo, 142-0062, ito@nariwai.org

^{*3} Masumi Fukuda, Doi Koumuten, 524-15, Tanaka, Adogawa-cho, Takashima-shi, Shiga, 520-1217, fukudamasumi17@gmail.com

^{*4} Takamitsu Hayakawa, Tateishi Kobisha, 114, Kanan-cho, Fuchu-shi, Hiroshima, 726-0032, with.dune03@gmail.com

^{*5} Kohei Sakurai, Graduate School, Nagaoka Institute of Design, 4-197, Senshu, Nagaoka-shi, Niigata, 940-2088, a235004@st.nagaoka-id.ac.jp

キーワード: 社会-空間系, 集落, デザインプロセス, タイ, アカ族,

1. はじめに

1.1. 研究の背景

1.1.1. 社会と空間 たとえばある家庭のリビングに、テレビが1台置かれているとする。このテレビは物理的なモノであり、リビングという空間内に存在している。またテレビの周りにはビデオデッキやゲーム機のような周辺機器が置かれ、テレビの前には家族が集まるといったように、テレビの存在は空間のあり方を変えるだろう。つまりテレビは、空間的な存在である。

一方で、このテレビがなぜここにあるのかを考えてみる。テレビを購入したこの家庭は、その購入に耐えるだけの経済力を持っているだろう。隣人も友人も皆テレビを持っているから、自分たちも当然導入した、という理由もあるかもしれない。テレビから得た情報を活かし、普段の生活行動も変わるだろう。その情報コンテンツは、そのテレビから遠く離れた場所で顔も知らない人々によって制作されている。そしてそもそも、テレビや電気や液晶などといった技術・製品の開発や普及がなければ、このテレビは存在し得ない。このようにテレビは、社会的な存在でもある。

テレビという媒体により、社会と空間は分かちがたく結びついている。当然、他の存在物についてもそうであるし、世の中に起こるさまざまな出来事、人の行動などについても同様のことが言える。社会と空間は切り離せず、一つの系として見るべきである。そこで筆者らは、環境心理学における「人間-環境系」⁽¹⁾の考え方も参考にしながら、「社会-空間系 (socio-spatial system)」なる概念として、このまともを捉えようと試みている⁽²⁾。

我々の暮らす世界では長い年月をかけて、社会的な変化が空間を変え、また空間の変化が暮らしや仕組みを変えている。社会-空間系は日々、その姿を更新しているのである。

1.1.2. 多様な事象の絡まり合い 先の例で見たように、テレビという一つの存在が、その周辺の空間、情報や経済、ユーザーの生活や人々のコミュニティ、技術や制度などといった多様な物事との関係性を結んでいる。そしてテレビは、発明され、改良され、量産され、普及され、購入され、使用され、修理され、廃棄されるといったように、諸々の出来事を経ており、これらの出来事同士がテレビを介して関係し合っているとも言える。

特に現代において、こうした物事や出来事一本稿ではさしあたり「事象」と呼ぶ一の間に結ばれる関係性の網は、ますます複雑になってきている。テレビをはじめとする現代の技術のほとんどが、遠い異国の地で生まれ、我が国に伝わったものだ。その結果、たとえば自動車は、速くて楽な移動手段という開発当初の意図を越え、郊外のスプロール、中心市街地の空洞化、交通渋滞、自動車産業都市の出現といった多様な現象につながっている。一つの事象が、グローバルな関係性の広がりの中で、思わぬ帰結を生むに至るのだ。その意味では新型コロナウイルスは人々の生活行動を、認知様式を、政治を、経済を、医療を動かした。コロナ禍前には「テレビ会議システム」という仰々しい装置によってようやく実現していた遠隔地での打合せが、今や家庭でも当たり前の風景となっている。

デザイナーは、多様な事象が複雑に絡み合い、世の中が容易に変化することを前提としてデザインを行なわなければならない。しかしアレグザンダーは、現代社会は複雑さを肥大化させ、デザイナー個人の認識能力をはるかに超えていると指摘している⁽³⁾。

1.2. 本稿の目的

アレグザンダーの言葉にもあるように、デザインの前にまずは状況を認識しなければならない。多様な事象のグローバルな関係性の網の中で、社会-空間系がどのように変わ

り続けているのかを、知ることである。そして知るためには、この複雑で膨大な現象を、一定の手続きで記述するための方法が必要である。

本稿は、タイ北部にあるユースック村（以下、本文中では「Y村」と表記）という集落を事例としながら、社会-空間系の変容過程の記述方法を探索することを目的とする。

1.3. ユースック村の研究と本稿

Y村は、少数民族・アカ族の暮らすタイ北部の集落である(図1)。ユースックの人々は1983年にこの山あいの地に定住を始め、竹を主材料とする家屋により集落を形成し、精霊信仰に則った伝統的な暮らしを続けてきた。しかし1990年代に入り、道路や電気などのインフラ整備、新建材の流通、キリスト教への改宗などにより村は少しずつ変化する。筆者らは竹の伝統建築の技法を学ぶため2014年から同村に通ってきたが、昨年の夏、コロナ禍を経て3年ぶりに村を訪れたときの驚きは大きかった。若者たちの多くは海外への出稼ぎに消え、そこで得た資金を元に、カラフルなコンクリート造家屋が次々と建設されていたのだ。

筆者らはここで毎年の調査を10年間続け、今まさに起こりつつある現象を記録し、社会-空間系の変容を解明する予定である。本稿はその1年目(2022年)の調査までで得られた、定住以来の約30年間にわたる村の変容に関するデータを対象としたケーススタディである。このスタディは、いかなる調査をすればより精緻な記述が可能かを知る狙いも持っている。現状のデータをいったん記述の俎上に載せることで、この先9年間の調査方法をブラッシュアップする。

1.4. 先行研究と本研究の位置づけ

歴史の流れを可視化する概念モデルやシステムの例としては、次章で詳しく説明する北らの一連の研究があるが、他に、文学作品や一揆などの歴史的出来事の遷移を可視化した花島らの「暦象オーサリング・ツール」⁽⁴⁾がある。時系列上のネットワークモデルをベースとする点も、本稿と共通する。ただY村という現在進行形で変わりつつあるフィールドで、筆者らが自ら調査して得られたデータを用いて、かなり幅広く、かつ高い解像度での記述を目指す点や、抽象モデルと記述、調査の間の往還により研究を進める点で、大きく異なっている。他に、工業デザイナーの思考過程を構造化した窪田らの「ヒストリベース」⁽⁵⁾、作業フローにおける危機管理を分析するホルナゲルの「FRAM」⁽⁶⁾なども参考になるが、やはり社会-空間系という視野の幅広さや、扱うタイムスパンなどの点で本研究は独自性をもつ。

2. 記述の方法論

2.1. 2つの理論モデル

北(本稿第一筆者)らはこれまで、我々の世界の変容を記述するための理論的枠組みとして、「イベントネットワークモデル(events network model: ENM)」と「オブジェクトメッシュワークモデル(objects meshwork model: OMM)」を提案してきた^{(7)~(9)}他。

ENMは先に述べた、テレビで言えば発明や生産、購入や廃棄のような「出来事」を単位としたモデルである。都市計画、建築設計をはじめ、プロダクトデザイン、法規の制定や思想の提唱なども含む幅広い意味でのデザイン行為、そして災害や戦争など人が意図しない事象をも含めた、何が変化するかを広く「イベント(event: E)」と呼ぶ。

イベント同士は、さまざまな関係性を取り結ぶ。ある建物が新築され、数十年後にリノベーションされたとき、新築とリノベーションという2つのイベントは、当該建物が共通することで関係づけられる。リノベーションにより建物の価格が上がれば、リノベーションと価格上昇という2つのイベントは因果関係によって結ばれる。イベントを、起こった時間によって時系列上に配置し、関連するイベントをリンクすることで、ネットワーク構造がつけられる(図2)。

次にOMMについて。繰り返し用いているテレビの例では、テレビそのものに注目すると、工場で生産され、店舗に運ばれて販売され、消費者が購入して自宅に置き、粗大ゴミとして施設で処分され、また部品がリサイクルされるといったように、テレビはいろいろな出来事を経ながら、空間内を、またいろいろな人の手の間を、連続的に移動している。このような個々の要素の動きに着目するのが、OMMである。人、場所、もの、概念など多様な要素を等しく「オブジェクト(object: O)」として捉え、各オブジェクトが、時空間上に「ライン(line)」を描くと考える。ネットワーク構造におけるエッジはノード同士を結ぶだけの抽象度の高いものであるが、この場合のラインの軌跡には時間的、位置的な意味合いがある。そして多数のラインの絡まり合

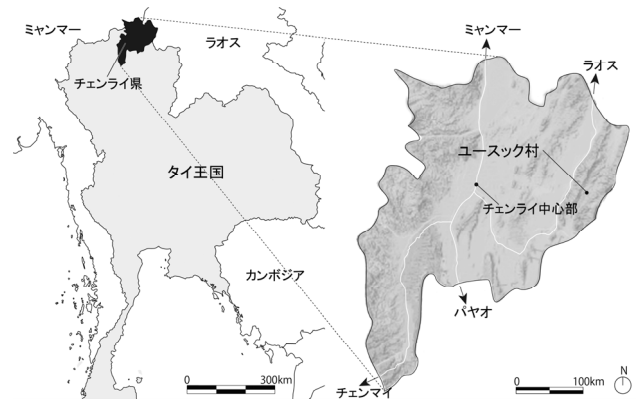


Fig.1 ユースック村の位置

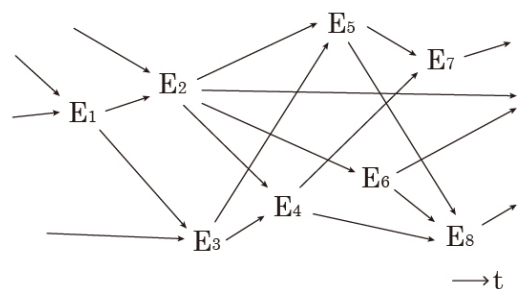


Fig.2 イベントのネットワークモデル

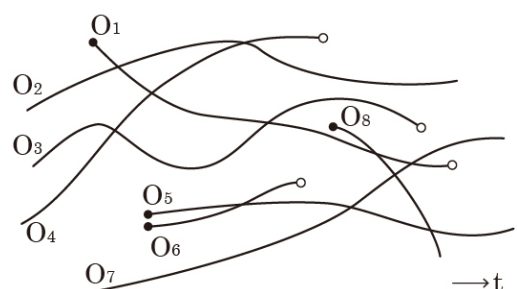


Fig.3 オブジェクトのメッシュワークモデル

いを、メッシュワーク構造と呼ぶ(図3)。ラインやメッシュワークといった語は、文化人類学者のインゴルド⁽¹⁰⁾によるものである。

ENMの各イベントには、人やモノといった多様なオブジェクトが関与する。またOMMでは、オブジェクトの描くライン上には、そのオブジェクトが経てきた変化がイベントとして刻まれる。イベントは、ライン同士が絡まり合うところに生じる。このようにENMとOMMはイベント、オブジェクトという概念を介して同じ現象を異なる視点で記述しているにすぎず、いわばコインの表裏のように、相互に解釈を切り替えることができる。

2.2. データを用いた記述方法の検討状況

2つのモデルはあくまで抽象的なものであり、実際に起きている現象を記述するには、別途検証が必要となる。北はこれまで、いくつかのデータセットをサンプルとし、社会-空間系の変容を試験的に記述し、方法論を発展させてきた。

まず、京都市左京区大原大見町という無住化が進む小集落において、その歴史について記した17の資料を元にケーススタディを行なった⁽¹¹⁾。保城の「中範囲の理論」⁽¹²⁾を手がかりに、記述すべき対象(時間・空間・イシュー)の範囲を定めた上で、資料から282のイベントを抽出した。そして各イベントについて、特に空間の状態の変化に着目し、建物や行政単位などといった空間要素の、どのような側面

がどう変化するかを、記述する手続きを構築した。その上で、大原小学校尾見分校と、大見集落全体について、位置や活動状態、世帯数など複数の側面での通時の変化を、時系列に沿って可視化した(図4)。その結果、この小さな集落の動きがグローバルな文脈と密接にリンクしていることが確認された他、記述の過程で資料批判を行なうことができることも示した。このスタディは、一つのオブジェクトを軸に連なるイベント群を、一定の方法で記述するための手続きと文法を開発したものである。

次いで北は、OMMを地理空間上において記述する情報システムを構築すべく、この大見町のデータを用いながら、システムの備えるべき要件を検討した⁽¹³⁾。各オブジェクトが描くラインを、x軸に時間、yz平面に地理空間をとった三次元空間上に表現する(図5)。先に見た大原小学校尾見分校は、3度の移転によりこの空間内を移動する。制度や技術のような地理座標を定めるのが難しいオブジェクトについては、三次元空間とは別の「副空間」にラインを描く。この図を念頭に、情報システムのインタフェース、備えるべきデータベースの構造などについて検討した。

2.3. 本稿での記述方針

以上を踏まえ、本稿ではさらに記述の方法論を展開する。北が大見町のデータを用いて試みてきたような、記述文法の開発や情報システム実装のための要件抽出といったテー

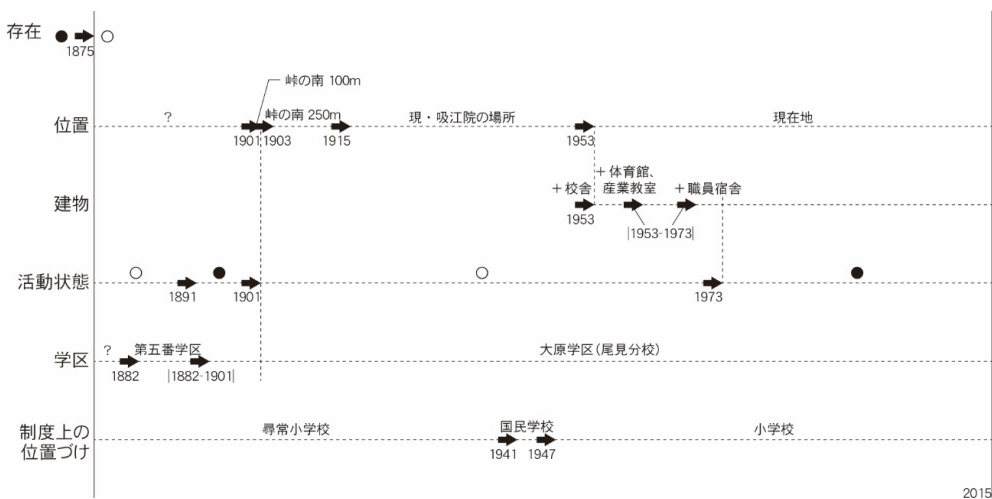


Fig.4 「大原小学校尾見分校」の変容過程の記述

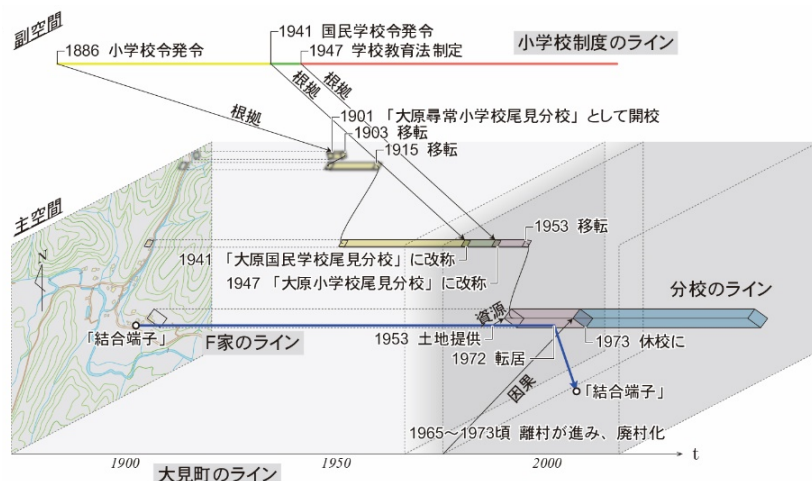


Fig.5 大見町についての OMM の地理空間上での記述の試行

マは、さまざまな事象を一定の手続きで処理し、同じ形式に落とし込むために重要である。しかしそれだけでは、社会-空間系にかかわる諸事象のダイナミックな関係性を捉え切れない。そこで本稿では、個々の事象の記述の定式化を目指すよりも、事象同士の関係性を記述し、その広がりを捉えることに焦点を当てる。

社会-空間系を広く扱うため、理論モデルとしては、大見町でのスタディで着目したオブジェクトの空間的な遷移はいったん捨象し、ENMのようなネットワーク構造を念頭に置いて進める。ただし、完全にENMに則った記述を目指すわけではない。後に4.1.2.で述べるように、データから抽出される事象が、必ずしもイベントという形式ではまともでないからである。

3. ユースック村の社会-空間系の変容の記述

3.1. 用いるデータソース

Y村の調査ではヒアリングや実測によって、大きく5種類のデータを取得している。①村全体の歴史、②村全体の82世帯の概要(家族構成や来歴など)、③村全体の建物の配置図、④村の中心を通る「B通り」に沿った20世帯のライフヒストリーや保有する家電などの詳細データ、⑤B通り沿い全世帯の住戸内を含む平面図、である。村全体の傾向を押さえる一方で、B通り沿いの20世帯についてはかなり詳細に知ることができており、全体と部分の両者、およびそれらの間の関係を捉えることを意図している。執筆時現在、①④については1983年の定住開始から調査1年目(2022年)に至る約30年の期間についてのデータ、②③⑤については2022年時点のデータを持っている。今後毎年調査を積み重ねることで、変化をより仔細に捉えることができる。

先に述べた大見町の場合、手がかりにしたデータは第三者によって書かれた歴史資料がほとんどであるのに対し、Y村では筆者ら自らがヒアリングや実測によって取得し、整理したデータである。今後データの種類を増やしたり、調査方法をアレンジしたりもできる動的なものである。また既に無住化している大見町とは違って、現在まさに激変の最中にあるY村では、グローバルな文脈下における地域の変容がリアルタイムに観察できるという特徴がある。

さて、①～⑤の元データは分量が膨大で、現状では十分に整理し切れているとはいえない。本稿はあくまでケーススタディであるため、これらの元データを直接参照するのではなく、このデータに基づいて筆者ら自身がまとめた論文⁽¹⁴⁾(以下「対象論文」と呼ぶ)の本文を、データソースとする。対象論文に絞ることで、約30年間の社会-空間系の変容の大筋を掴むことができると考えている。

3.2. 記述プロセス

まず対象論文の本文中から、Y村の社会-空間系に関する事象(オブジェクト、出来事、状態など)について述べているテキストを抜き出す。それを、必要に応じて要約や簡略化を行ないながら、記述において意味のある単語や文のまとまりにまで分解する。なお村の将来予測に関することは記述対象から除外し、逆に過去のことについては筆者らの推測による事象も含む。

次に、それらを時系列上に配置する。対象論文は村の変容を「移住初期(1983年～1992年頃)」「発展期(1992年～)」「現在(2022年)」の3段階に分けて整理していることから、

本稿もそれに従って時系列を区切る。ただし出現や発生の年代が明確に定められない事象も多いため、時系列の並びは正確を期すわけではない。

そして対象論文内の記述を根拠に、事象間の関係性を表現する。2.2.に述べたような「要素」と「側面」の関係はツリー状に整理する。ある事象が次の年代に別の姿に変わる場合や、事象間に因果関係などがある場合など、関係性の違いによりリンクを描き分ける。

以上より得られた記述結果が、図6である。対象論文からだけでも多様で膨大な数の事象が挙げられ、かつ複雑に関連しあっていることがわかる。次章では図6を元に、いくつかの考察を行なう。

4. 考察

4.1. 記述の方法や意味合いについて

4.1.1. 要素と側面 図4の大見町の事例では、変化するオブジェクトを要素と側面に分け、イベントにおいて要素は不変で側面が変化するというように捉えた。本稿でもその考え方は活かされている。たとえば「母屋」という要素はタイムラインの冒頭から存在するが、その中での「材料」という側面が特に、30年間で大きく変化していくことになる。

ただし移住初期には母屋は「調理」という側面を持っていたが、それが次第に母屋を離れ、発展期には台所が別棟化される。このように、要素や側面のラインナップは時間的に一定ではないこともある。単純に同じものが変化するのではなく、新しいオブジェクトが生まれたり、オブジェクト同士が離合集散したりしており、そのことは、社会-空間系の変容過程をより複雑にしている。

4.1.2. 出来事と状態 図6内に書かれているテキストのうち、「Y村に移住する」のような明快に「出来事」として捉えられる事象は決して多くはない。それ以外のテキストの多くは、たとえば「農地不足」「水は水場で汲む」のように、オブジェクトの側面がある期間に示す「状態」を表わす文である。特に「現在(2022年)」に記した事象のほとんどは、現在見られる大まかな状態、傾向を示す。つまり図6はモデル通りのENMではなく、おおよそ、状態遷移の図だと見ることができる。すると出来事は、ある状態から別の状態に遷移する、図6内での太い実線矢印の上に、内在していると言える。

ただ、状態遷移で表現される事象の多くは、村全体の傾向についてのものである。図の下方に記載された個々の世帯・人物の履歴の多くは、出来事を示すテキストによって表わされている。たとえば村全体に木造の建物が増えることは状態遷移であるが、Y氏が2009年に家屋を竹造から木造に建て替えたことは一つの出来事である。このような個々の出来事の集合が、全体の傾向としての状態遷移をつくりあげるのだ。

部分(個物)と全体(集合)は、図6では相互に関連する並列のオブジェクトとして記述しているが、集合論的に描くこともでき、今後の検討課題の一つである。

4.1.3. 記述のまとめ 図6では多数の事象を「家屋」「インフラ」などの領域に分けて記述している。しかしこのカテゴリーは実際は、決して直和的に割り切れるものではない。たとえばキリスト教改宗によって精霊信仰の祭壇が

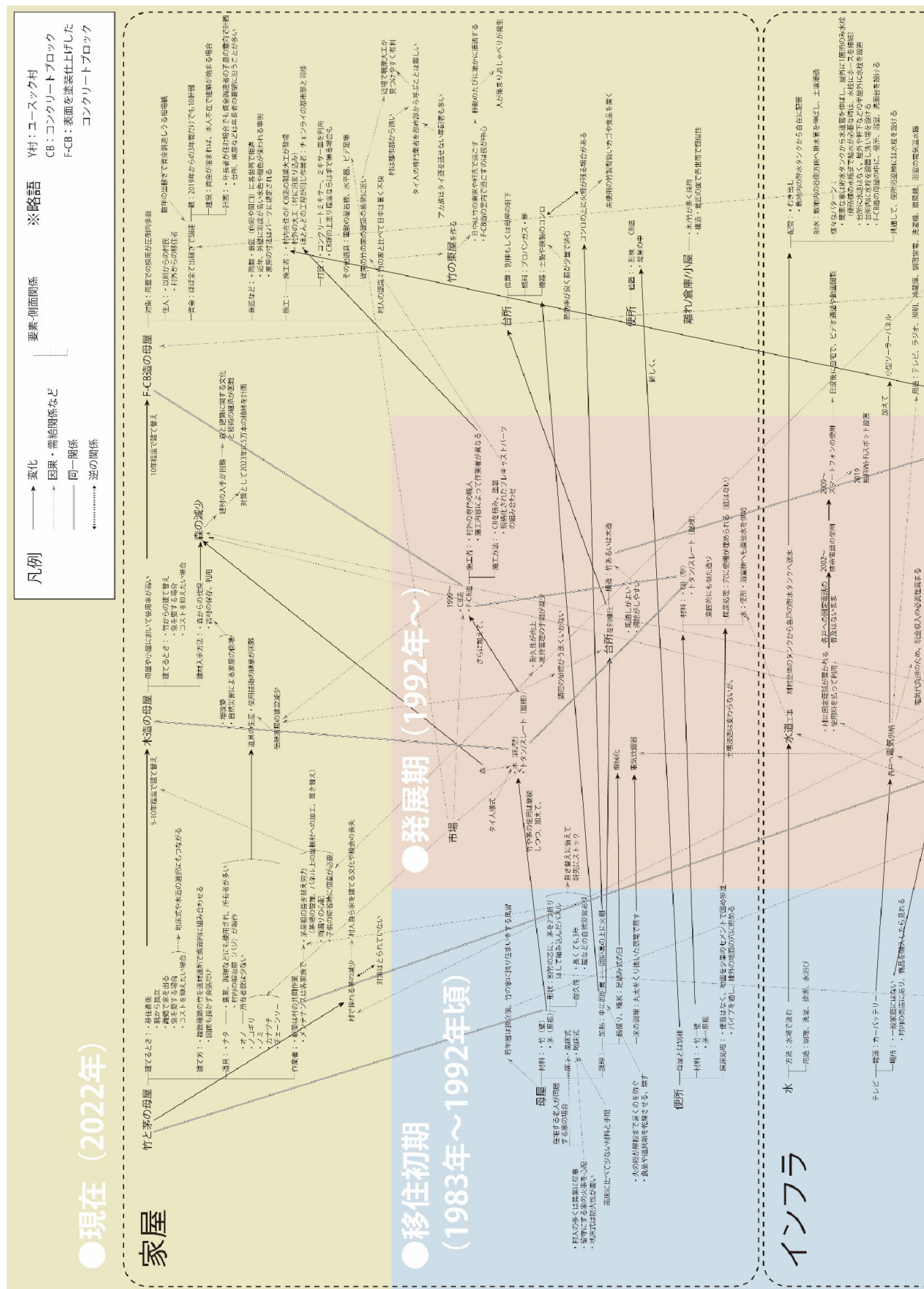
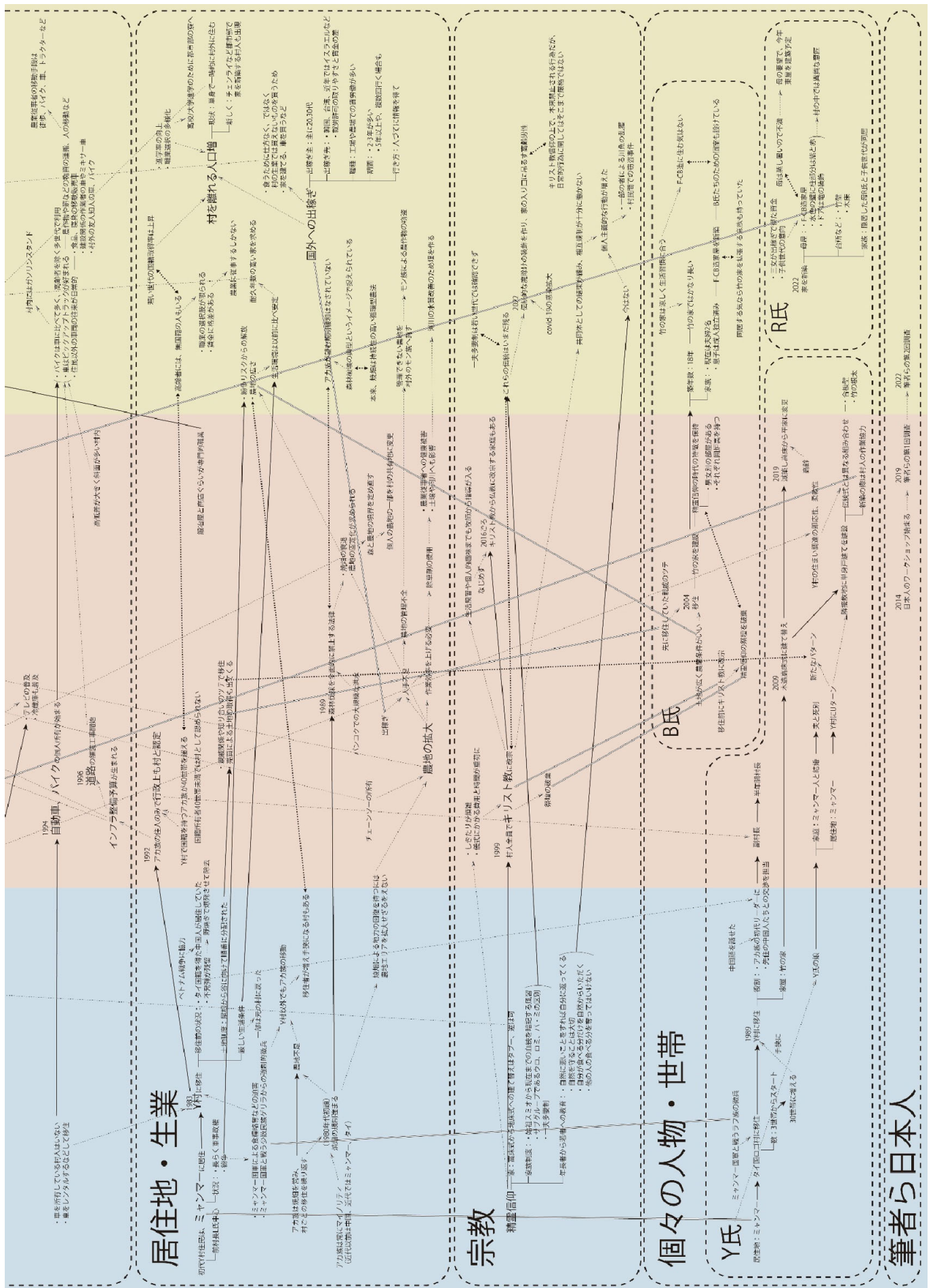


Fig.6 ユースック村における定住開始前後から2022年までの社会-空間系の変容の記述結果



破棄されるという出来事は、宗教的であると同時に家屋の中において起こるから、本来は「宗教」「家屋」のカテゴリーをまたいでいる。また家電やバイクは家屋の中や軒下に置かれているから、「家屋」と「インフラ」も交錯しうる。

さらに要素-側面の間に階層構成を設定することで、個々のオブジェクトの状態を記述しているが、この階層構成のつくり方も悩ましい。家屋の記述は建物種別（母屋、便所など）を要素とし、その中に建築材料（竹、木、コンクリートなど）などを側面として記しているところと、逆に建築材料を階層構成のトップに据え、その材料を使って建てられる建物種別を側面としてぶら下げているところがある。

このように、社会-空間系はさまざまな切り口で整理することができるが、その切り口同士の間はセミラティス状に絡まり合っている。その中で記述方法を一意に規定することは、図らずも、世界の見方を提示することにもなる。この見方を固定化しないためには、見方に応じてネットワークの組み方が変わるようなインタラクティブな情報システムを、実装するのがよいと考えられる。

4.1.4. 問いを生む記述 本研究において、データを元に社会-空間系の変容を可視化する図6のような図は、目指すべき成果の一つである。しかしこの記述はゴールであるだけではなく、新たな研究の問いをも生起させてくれる。

たとえば図6で、移住当初の母屋の床の形式として高床式と地床式の別が挙げられている。地床式を選択する理由は防火、施工の容易さ、信仰と3つ述べられているが、高床式に対しては、防火をあまり気にしなくてよいケースに選ばれるという消極的な理由しか示されていない。本当に、そうなのだろうか。たとえば湿気やネズミの侵入を防ぐ、何らかの信仰上の理由があるなど、高床を選ぶ積極的な理由があるのではないか（実際にアカ族の高床式住居は、精霊信仰により多重に意味づけられている⁽¹⁵⁾）。また図の最下方に、筆者ら自身のワークショップや研究活動の履歴も記しているが、これらは他の事象とのリンクをもっていない。しかし筆者らの活動は、村の空間や文化、経済に多少なりとも影響しているはずであるし、筆者らの活動がこの村から得るものはそれ以上に大きい。村人たちによっていまだ語られていないリンクは、どのようなものだろうか。

このように、ネットワーク内に欠けているであろう要素を探することで、新たな問いが生まれる。その問いは、次の調査（現地調査や文献調査）の項目に入ってくる。そしてその調査を受けて、ネットワークはさらに拡大する。つまり調査と記述との往復によって、研究を探索的に推進することができる。ネットワークは、常に未完成であってよい。

4.2. 社会-空間系の変容の傾向

4.2.1. 社会と空間 図6には、外的に目視可能な状態や出来事もあれば、そうでないものもある。社会と空間とが決してきれいに切り離せるわけではないが、この目視可能性という仮の区別を念頭に図内のリンクを追っていくと、空間的な変化が社会的な出来事の要因となり、またその社会の変化が空間変容を誘起するといったような、絶え間ない相互関係が確認できる。

先の、ネットワーク内に欠けているものを探するという研究の方法論に照らせば、空間的な記述を見ればそれに接続しうる社会的な事象を、社会的な記述に対してはその空間的なあらわれを、探索することも有効になるだろう。

4.2.2. 部分と全体との関係 先に、部分（個物）の出来事集積が、全体（集合）の状態遷移につながることを指摘した。これは裏返せば、集合の性質や振る舞いが、その集合の成員たる個物に引き継がれるという、集合論においてごく常識的な考え方に対応する。

しかし抽象的な集合論とは違って、全体と部分の振る舞いが必ずしも一致しないのが現実社会の面白いところである。B家は2004年に移住して建てた、精霊信仰の形式に則った竹の家を、村内で唯一、現在まで維持し続けている。移住以前に既にキリスト教への改宗を済ませているにもかかわらず、母屋と台所が別棟となる家がほとんどの中、依然として母屋の中の、男女別に設けられた囲炉裏で調理を続けている。そして息子の建設したF-CB（塗装仕上げされたコンクリートブロック）造家屋に、移るつもりはない。

全体の傾向とは違った動きをする個々の事例が、今後の新しい傾向をかたちづくっていく可能性もある。Y家の三女はミャンマー人と結婚してミャンマーに居を移したが、夫との死別に伴いY村に戻り、両親の家の隣に一人暮らし用の住まいを新築した。新築という出来事は、ツテを辿った村外からの移住か、村内で家族が増えたことによる分家が大多数であり、Uターンは珍しいケースであるが、このY家三女の動きが未来を先取りしている可能性があることを、対象論文でも指摘している。

4.2.3. リンク数 図内に記載された各事象の中には、他の事象とのリンクが多いものも少ないものもある。このネットワークはリンクに方向性のある有向グラフの形式を取っているが、リンク数の多い事象は重要であると見て、図内で文字を大きくしている。

数多くのリンクの起点（矢印の根元側）になっている事象は、さまざまな出来事や状態に対して影響を及ぼした事象だと読み取れる。発展期には、タイ政府から独立した村として認められたことで、政府の予算がつき、電気や水道、道路といったインフラの整備が一気に進行した。また竹や茅、木といった材料は移住初期には周囲の山から自分たちで調達していたが、発展期には市場が、コンクリートのプレキャストパーツやトタンといった材料、工具などの供給源となり、建物構造の変化が起こった。行政的独立や市場は、このネットワークにおける重要なノードなのである。

逆にリンクの終点（矢印の先端側）が多く接続する事象は、多くの条件が揃うことではじめて成立した、あるいはそれにより変化が協力的に推進された、出来事や状態だということになる。F-CB造の母屋は先述の市場の他、国外への出稼ぎ、居住地の安定化、竹の家の管理の労力などといった条件のもと、現在その割合を急激に増している。

4.2.4. グローバルな事象の受容と変形 先に述べた、多くのリンクの起点となった行政的独立や、市場による建材供給は、いずれも村の外の物事によって起きた変化である。村というローカルな空間が、グローバルな文脈によって大きく変容したのだ。近年の若者の出稼ぎという現象も、その一例である。

しかしローカルが、グローバルな動きの波にそのまま従って変わっていくわけではない。たとえば近代都市の成立に大きく寄与したコンクリートは、基本的に、建物の形状に合わせて現場で打設される材料である。土木の現場では、側溝や擁壁に既製のコンクリート製品が使われることがあ

るが、建築では通常、コンクリートは現場一品生産である。しかしY村では、現場で打設したように見えるコンクリート造の建物は実は、コンクリートブロックを積みその上からモルタルと塗料で塗装することによってつくられている。そればかりか、床板も、柱さえも既製品としてつくられ、建材屋で売られているのである。Y村はコンクリートというグローバルな建築材料自体は受け入れたものの、現場打ちというグローバルでの常識は、ローカルに入る過程でプレキャストを主体とした施工方法に変わっている。この変容は、なぜ、どこで起きたのだろうか。Y村やその周囲に限定されたものか、タイという国単位でこの技術が広まったのか。他にも、キリスト教に改宗したといってもその教えは厳格さを欠き、精霊信仰の慣習や行事もまだ一部には残っている。教えを現地の信仰や風土と融合させ、土着化させることは、戦国期に日本に渡来した宣教師の苦心とも重なる。

グローバリゼーションの進む中でも世界が完全には同質化しないのは、ローカルがグローバルを受容するときの土着化の作用が、一因にあるのではないだろうか。対象論文では、いわゆる先進国で生み出された近現代の技術や思想を受容するこの村であるが、「遅れてきた近代化」を経験しているというのではなく、しなやかにそれらの技術や思想を変容させ、我々の社会と「並行して進む現代」を生きていると捉えるべきだと、結論づけている。

4.2.5. 地域固有の伝統とは 土着化を受けるとはいえ、近年、グローバルな技術や経済がローカルな村の社会-空間系をドラスティックに変容させつつあることは確かである。ただ、過去に遡ってもそのことは同じだった。Y村は、ミャンマーに居住していた人々が内戦での迫害を避けて移住して、立ち上げられたものだ。そもそもアカ族は中国南部にルーツを持ち、タイやミャンマーの山岳部を頻繁に移動し、離合集散しながら暮らしてきた。Y村という村落は、地理的にも社会的にもここで完結したことは一度もなく、集落あるいは国家といった枠組みを超え、多様な出来事、物事の関係性の網の中で変わり続けているのである。この村に固有の伝統など、幻想と言えるかもしれない。

世界中の集落を旅した原も、集落を地域性や伝統といったナショナリズムの観点からのみ見ることは危険で、むしろ遠く離れた集落同士が類似性の網でつながっていることを指摘している⁽¹⁶⁾。グローバリティは近現代社会の特権ではなく、普遍的なものではないだろうか。Y村で起こっていることは、少しずつかたちをかえて、アカ族の他の集落、あるいはタイ国内、アジア各地の集落でも起こっているはずだ。図6のネットワークは、そのことをも暗示している。

5. おわりに

5.1. 本稿の成果

本稿では社会-空間系の変容の記述方法の開発を目的とし、北らのこれまでの研究を土台として方法論の検討をした上で、Y村におけるケーススタディを行なった。

データに基づいて、図6のネットワークを作成したことは、大きな成果である。歴史学や社会学の論文の中で、このような時系列の相関図は散見される。しかしここまでの大きさのものは例がなく、本研究の記述の対象範囲の広さと解像度の高さを反映している。この膨大さが、社会-空間系の変容のリアルな実像を表わしているとも言えるだろう。

そして4章では記述モデル、研究方法、社会-空間系の変容の特徴などに対する多様な考察ができた。この考察は、今後の研究展開の礎となる。

5.2. 本研究の今後の課題

Y村の研究としては、図6をベースとして今後、1年ごとの変化を詳細に追っていく予定である。

社会-空間系の変容の記述方法の研究としては、図6はまだプロトタイプ段階である。記述方法の統一性を欠く部分が多く、文法としてはより精緻化が必要である。現状では「Adobe Illustrator」を用いて手動で作図しており、手間が膨大である上に、記述のカテゴリーや階層構成の変更に対して柔軟性に欠ける。インタラクティブなデータの入力や解読ができるような、情報システムを実装したい。図5のような地理情報との連携も、将来的な課題となる。

文 献

- (1) 日本建築学会編：人間・環境系のデザイン，彰国社，1997.
- (2) 北雄介・伊藤洋志・福田真澄・早川貴光：タイ・ユースック村を事例とした社会-空間系の変容過程の研究，住総研 研究論文集・実践研究報告集，No.49，pp.237-248，2023.
- (3) アレグザンダー，C.：形の合成に関するノート，中埜博訳，鹿島出版会，2013，p.4.
- (4) 花島誠人・友部謙一：曆象オーサリング・ツールの開発，HGIS研究協議会編，歴史GISの地平 景観・環境・地域構造の復原に向けて，pp.39-50，勉誠出版，2012.
- (5) 窪田敦之・田浦俊春：エンジニアリングヒストリベースの研究，精密工学会誌 62(3)，pp.377-382，1996.
- (6) ホルナゲル，H.：社会技術システムの安全分析—FRAMガイドブック，小松原明哲訳，海文堂出版，2013.
- (7) 北雄介：デザインされたものにおける拡張的現象の記述方法に関する基礎的研究，土木計画学研究・講演集，vol.52，pp.662-668，2015.
- (8) 北雄介：「オブジェクトのメッシュワーク」モデルによる都市の変容過程の記述に関する試論，土木計画学研究・講演集，vol.53，pp.3122-3130，2016.
- (9) 北雄介・中小路久美代・山本恭裕：「デザインの現象」の理解に向けた研究方法論，第67回日本デザイン学会研究発表大会概要集，pp.16-17，2020.
- (10) T. インゴルド：ラインズ 線の文化史，工藤晋訳，左右社，2014.
- (11) 北雄介：都市の変化を記述する文法および手続きの開発—京都市左京区大原大見町の変容過程をサンプルデータとして—，都市計画報告集，No.14，pp.180-186，2015.
- (12) 保城広至：歴史から理論を創造する方法：社会科学と歴史学を統合する，勁草書房，pp.25-45，2015.
- (13) 北雄介：地域の履歴を蓄積する汎用プラットフォームのプロトタイピング，土木計画学研究・講演集，No.55，pp.1-8，2017.
- (14) 文献(2)に同じ
- (15) 清水郁郎：家族とひとの民族誌—北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌，風響社，2005.
- (16) 原広司：集落への旅，岩波新書，pp.5-6，1987.